

## はじめに

本報告書は、平成 24 年度に取り組んだ千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト「社会とつながる学校教育に関する研究」（研究代表者：藤川大祐 千葉大学教育学部教授）の成果をまとめたものである。

私たちは、平成 23 年度、千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクトとして、「社会とつながる教員養成に関する実践的研究」に取り組んだ。ここでは、教員養成段階の学生を従来の学校文化に適応させることばかりが重視される状況を批判的にとらえ、学校と学校外の社会との両方を視野に入れ、社会の変化に対応した学校を支えられるような教員の養成がいかに可能であるかを、いくつかの実践的な取り組みを通して検討した。

もちろん、「社会とつながる教員養成」は重要なテーマであり、私たちは引き続き実践的な研究を重ねなければならない。他方、私たちの課題は教員養成のみにとどまるものではなく、学校教育全般を視野に入れた取り組みが求められている。

そこで、平成 24 年度は、テーマをより広く「社会とつながる学校教育」とし、学校と学校外の社会とをさまざまな形でつなげる取り組みを、広い視野をもって進めることとした。

私たちの研究室は「授業実践開発研究室」であり、社会の多様な主体の協力を得た新しい教材や授業プログラムの開発を中心とした研究室である。今回も、学生たちによる初等中等教育における新たな授業プログラムの開発が、研究の中核をなしている。特に、情報通信技術の発展を背景とした社会の変化をふまえ、従来は小学校や中学校で扱われてこなかった新しい教育内容を扱う授業プログラムの開発で重要な成果を重ねられていると考えている。

また、教員養成教育のあり方についても、引き続き研究を進めている。今回も、藤川による大学での取り組みを含め、複数の論文を掲載している。今後も、教員養成教育の現状や歴史を展望しつつ、新たな試みを進めていきたい。

この一年の間に、いじめや体罰の問題が注目され、学校教育のこれまでのあり方が批判的に問い直される機会が増えている。他方、中学生や高校生にスマートフォンが急速に普及する等、子どもたちの世代の情報・メディア環境が大きく変貌しつつある。地域振興のあり方、国際社会における日本のあるべき姿等も、あらためて問い直されている。東日本大震災発生以降、政府と市民との関係や地域における学校の役割も、問い直されることが多くなった。

私たちの研究は、こうした状況の中で、私たちが今後学校教育をどのように構築していったらよいのかという問題意識に基づくものである。現段階では、成果より残された課題のほうが圧倒的に大きいと感じてはいるが、本報告書がこれからの学校教育に多少なりとも寄与するものであることを願っている。

千葉大学教育学部教授  
藤川 大祐

